

研究事業：厚生労働科学研究費補助金（労働安全衛生総合研究事業）  
 研究課題：林業従事者における蜂さされ症例の研究（平成21～22年度）  
 研究代表者：平田 博国 獨協医科大学

【背景】厚生労働省人口動態統計において、ハチ刺傷による最近の死亡者数は毎年 10～20 名と報告されている。その死亡原因の多くは、ハチ毒に対する特異的 IgE 抗体を介したアナフィラキシーショックである。一般的に、ハチ刺傷後約 20%の人にハチ毒特異的 IgE 抗体が産生され、再刺傷により全身アレルギー反応を起こす危険性が非常に高くなる。ハチと同じ生活環境で作業する林野事業に関連した職員では、ハチアレルギー体質者が多く存在することが予想されるが、その頻度は明らかでない。また、ハチ刺傷によるアナフィラキシーショックの自己対策として、アドレナリン自己注射製剤を携帯することが最も重要である。

【目的】本研究では、林野事業に関連した職員に対する過去のハチ刺傷状況、ハチアレルギー体質者の現状の把握と、携帯用アドレナリン自己注射製剤の処方状況およびその使用歴について、調査・検討した。

【方法】2009年6月～9月の間、山間部で作業することの多い民間森林組合員 999 名、都市部から山間部で作業することの多い電気設備事業従事者 354 名、対照としてハチ刺傷を経験することが少ないこれらの事務職員 365 名 計 1718 名に対し、ハチ刺傷歴や携帯用アドレナリン自己注射製剤の処方およびその使用歴についてアンケート調査を行い、同時に血清アシナガバチおよびスズメバチ特異的 IgE 抗体を測定した。

【結果】森林組合員の 210 名 (23.0%)、電気設備事業従事者の 51 名 (17.4%)、事務職員 39 名 (13.2%) にハチ刺傷による全身症状出現歴を認めた。アシナガバチおよびスズメバチ特異的 IgE 抗体クラス 2 以上の陽性者 (図) は、其々民間森林組合員で 413 名 (41.3%) と 424 名 (42.4%)、電気設備事業従事者で 111 名 (31.4%) と 103 名 (29.0%)、事務職員で 65 名 (17.6%) と 55 名 (15.1%) に認められた。また、2008 年以前に携帯用アドレナリン自己注射製剤を配布されたことのある者は 172 名 (11.4%) で、その使用経験者は僅か 7 名だった。

【結論】今回の調査から、林野事業に関連した職員の中で、森林組合員や電気設備事業従事者の多くは、ハチ刺傷によりアナフィラキシーショックを起こす危険性が非常に高いことが分かった。しかし、携帯用アドレナリン自己注射製剤は、多くのハチアレルギー体質者に対し配布されてなく、また配布された職員においても、適切に使用されていない可能性が考えられた。今後これらの各民間森林組合員や電気設備事業従業員に対し、アドレナリン自己注射製剤の携帯を徹底・指導を強化する必要があるものと考えられた。

(図)

アシナガバチ特異的IgE抗体				スズメバチ特異的IgE抗体			
RAST score	林野事業関連	電気設備業者	事務職員	RAST score	林野事業関連	電気設備業者	事務職員
0	467 (46.7%)	212 (59.9%)	264 (72.3%)	0	448 (44.8%)	208 (58.8%)	279 (76.4%)
1	118 (11.8%)	31 (8.8%)	35 (9.6%)	1	127 (12.7%)	38 (10.7%)	31 (8.5%)
2	260 (26.0%)	67 (18.9%)	48 (13.2%)	2	272 (27.2%)	70 (19.8%)	43 (11.8%)
3	128 (12.8%)	36 (10.2%)	16 (4.4%)	3	125 (12.5%)	26 (7.3%)	10 (2.7%)
4	22 (2.2%)	6 (1.7%)	0 (0.0%)	4	24 (2.4%)	4 (1.1%)	1 (0.3%)
5	3 (0.3%)	2 (0.6%)	1 (0.0%)	5	3 (0.3%)	3 (0.8%)	1 (0.3%)
total	999	354	365	total	999	354	365